

スペイン語圏にルーツがある児童生徒との交流



国際学部4年 陳 泓 宇

「親に言われたからやっているけど、スペイン語が嫌いなので、スペイン語で話しかけるのをやめて」というのはペルーにルーツがある子供への学習会 AMAUTA で担当になった A 君に言われた最初の言葉であった。スペイン語で話しかけたら、親近感を持たれるのではないかと思っていたから、ガッカリした。もう一つ言語を運用できることがどれほど有利かは言うまでもないのに、子供を相手にムキになってはいけないと自分に言い聞かせ、その場では否定しなかった。

初めからにらみを利かされたが、相手は所詮七、八歳の小学生だった。難しい漢字が書けたらすぐに自慢してくるし、ちょっとだけ目を離したら、鉛筆と定規で戦闘機のようなものを組み立てて、隣の机の子と対戦を繰り広げる。止めさせられ、算数の問題に向き合わされたら、5分経たずに、またざわつき始める。何回か授業して懐かれると、完全に世代違いなポケモンをどんどん紹介してくるし、週末に行った水族館で見た大西洋なんか魚の話をこのサバとアジすら区別がつかない私に無我夢中でしてくれる。この遥々ペルーから来た子もチョコが好きで、ひと粒でももらったら、すぐ夏休みの課題が吹っ飛んだかのように笑顔を見せてくれるが、他の子が自分より1粒でも多くもらっているのを知ったら、またすぐに怒り出して、ワアと泣き出しそうになる。

このような天真爛漫な子供たちは歲月人を待たずに成長し、あっという間に高校受験で選抜を受ける歳になる。AMAUTA が終わって一か月後、宇大で開催された「多言語による高校進学ガイダンス」では、ペルーから移住してきた B 君一家に出会った。B 君は受験を控えている

のに、ガイダンスの時終始一言も話さず、ひたすらお母さんのちょっと後ろで黙って聞いていた。むしろ、B 君の父母の方が積極的に高校の情報や日本の進学システムについて聞いてくれた。B 君はただ一度だけ、趣味のサッカーの話の時、自分に関連性を感じたかのように笑顔を見せてくれた。しかし、自分の高校受験の時を思い出してみれば、中三の私でも人生プランなんか真剣に考えた事はなかったし、高校は親が決めてくれるだろうと何も目に入れていなかったけど、安心感はあったなあ、と B 君を見て懐かしくなった。それでも、その夫妻にとって、学費の高さや学校行事の充実度より、息子に日本語教育を提供できるかどうかにもものすごく関心があったところが印象的であった。

改めて考えると、あのとき私が A 君に言われた言葉を否定しなかったのは、子供を相手にしているからというより、心の底のどこかで賛同していたからかもしれない。「みんな同じ」、「協調性・協働力」が標語として打ち出される教育の場にいる、海外にルーツがある子供にとって、スペイン語ができる事は確かに邪魔くさいかも



AMAUTAの様子(2022年7月27日)
真岡市国際交流協会のタカハシ・タカシ氏より

しれない。なぜなら、ここで共生を目指すなら、「日本語」が出来ないといけない科目になるから。得意科目・不得意科目があってもいいはずなのに、「日本語」という科目が絶対的な優位に持ち上げられている。自文化への誇りや大切さなどより、

「日本人」に合わせて「日本語」を話すことがよほど緊急なことになるだろう。しかし、このような海外から来た人々に迎合を強いる多文化共生が果たして良いかという疑問は、ずっと頭から消え去る事はなかった。

令和4年度 子ども国際理解サマースクール報告

サマースクールに参加して

国際学部3年 高良 ユカリ

今回のサマースクールの企画運営は、私にとってとても貴重な経験となりました。過去のサマースクールに参加したことのある学生スタッフがいなかったことで、大きな不安を抱えていました。前日まで、自分たちが企画したものが上手くいくのか、ずっと心配でした。しかし、当日は子どもたちが楽しんでいる姿を見て安心しました。

サマースクール午前の部では、スタンプラリーを通して子どもたちにフランス・ドイツ・ブラジル・フィリピン・ペルー・中国・カンボジアについて学んでもらいました。各国の世界遺産や食べ物、文化、日本とのつながりなどについてあらかじめ作ったポスターを使いながら簡単な説明を行った後、クイズに答えてもらうというような形で行いました。多くの子どもたちが「それ知っている!」「食べてみたい!」「これはどうなの?」などと各国に興味を持ってくれたことに驚きました。午後の部では、ドイツ・ブラジル・フィリピン・中国・アメリカの遊びを体験してもらいました。また、いくつかの国の伝統衣装を準備し、着付け体験も行いました。子どもたちの楽しそうに遊んでいる姿や伝統衣装を着ている姿がとても印象的でした。

企画の段階では、子どもたちが楽しみながら異文化について学んだり触れたりできることをつねに意識していました。そのため、子どもたちが楽しんでいる、興味を持ってくれている様子を見てとても嬉しかったです。今回のサマースク

ールには、ドイツとカンボジアからの留学生や外国にルーツのある学生が多く参加してくれました。このような、学生と一緒に遊んだことや一日を過ごしたことは子どもたちにとってとても貴重な機会になったのではないかと思います。異文化について楽しく学んだこと、興味を持ったこと、外国にルーツのある大学生と一緒に過ごしたことが参加してくれた子どもたちに何か影響を与えることができたら嬉しいです。

他者・文化を理解するためにはまずは、興味を持つことが重要だと思います。そして、今回のサマースクールが子どもたちにこのような機会になったのではないかと思います。サマースクールを通して感じたこと、学んだことが子どもたちのどこかに残って、いつか役に立つことができればとても嬉しいです。私たち大学生にとっても、今回のサマースクールはたくさんのことを学ぶことができた素晴らしい機会でした。

